

学 界 報 告

〔学 会 名〕

The 21st IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics

〔参加セッション名〕

Effects of an Advance Care Planning educational program for care staff in an acute hospital

〔発表題目〕

急性期病院における Advance Care Planning 推進を目指した教育プログラムの効果評価

Effects of an Advance Care Planning educational program for care staff in an acute hospital

〔大会期間〕

平成29年7月22日(土)～平成29年7月27日(木)

〔場 所〕

アメリカ・サンフランシスコ

Moscone West San Francisco Marriott Marquis

※記事

第21回 IAGG (世界老年学会) は、5年に1度、6日間にわたって約5000名、30か国以上の世界中の老年医学・老年看護学・老年社会学、加齢に関する民間企業の研究、といった老年領域に関係する多領域の実践・研究者が一同に会する学会である。各研究者らがそれぞれの研究成果を発表し議論を深めると共に、世界的に進行する高齢化において、現在特に世界的な課題となっているトピックに基づいて様々なシンポジウム・セッション・ワークショップが行われる。私は、今回

自身がここ数年にわたり日本で取り組んできている Advance Care Planning に関する実践・研究結果を報告し、様々な議論を深める事が出来たと共に、今後の共同研究の推進に関する関係性も構築する事が出来た。以下では、その研究概要を報告する。

1. 研究目的

在宅や福祉施設での看取りが推進されつつあるが、未だ本邦の看取りの場は8割が病院という現状である。本人の希望に沿った End of life care 実践のためには、事前に医療・ケア従事者と本人・家族が今後のケアについての話し合いを行う Advance Care Planning (以下 ACP) の実施が求められるが、その実際的な方法論や専門職者に対する教育の機会はまだ少ない。よって本研究は、開発した急性期病院における ACP 実践教育プログラムの開発と効果評価を目的とする。

2. 研究方法

研究デザインは、対照群を伴わない1群の事前・事後テストデザインで、研究対象者は急性期病院に勤務する医療従事者全86名である。プログラムの構成は、3回(1回90分)の全体プログラムと1回の個人ワークである。第1回目は ACP に関する基礎的な講義、その後個人ワークとして自宅で事前指示書(AD)作成に関する視聴覚教材の視聴と自分の AD 作成、第2回は End of life に関する自分の価値観を知る事例検討、第3回は ACP 実践ロールプレイングとワークショップである。

データ収集方法は、研究開始前に予め ID 番

号を付与した3回分の質問紙と資料をファイルにして各参加者へ配布し、各調査時に同ファイルの調査用紙への解答を依頼し回収した。質問項目は基本属性の他、家族との終末期に関する話し合いの有無、EOLケアへの苦手意識、家族の看取り経験の有無、AD態度尺度、平井らの死生観尺度、Frommeltのターミナルケア態度尺度短縮版等の77項目である。それぞれ介入前後の平均値の差を対応のあるt検定にて分析した。所属大学の倫理審査委員会にて承認を得た上で、参加者に対して文書を用いて本研究への参加は自由であること等を説明し同意を得た。

3. 結果

ここでは、全3回のプログラム参加者である57名についての分析結果を示す。参加者の平均年齢は44.6歳(SD7.8)、平均経験年数は20.5(SD8.3)年、性別は男性11名、女性46名であった。職種は医師が10名、看護師37名、社会福祉士4名、薬剤師1名、介護福祉士1名であった。AD態度尺度では、介入前9.96(SD1.0)から介入後10.3(SD0.9)と有意に前向きな態度が上昇した($p=.03$)。平井の死生観尺度においては、「解放としての死」において介入前13.9(SD5.9)から介入後15.3(SD6.3)で有意に上昇した($P=.04$)。Frommeltの尺度では、「死に行く患者への前向きな態度」において介入前9.0(SD1.6)から介入後9.8(SD2.0)と有意に増加した($p=.01$)。

4. 考察

本邦では医療従事者に対する効果的なACP

実践教育プログラムの開発は未整備だが、今後より質の高いEnd of life care提供のためACP実践は重要な課題となる。本研究の介入直後の結果ではプログラム受講者のADへの前向きな態度の上昇や死生観の変化、死にゆく患者への前向きな態度等EOLケアに対する意識変化がみられ、一定の効果が示唆されたが、引き続き効果的な教育プログラムの開発に向けて検討を進める必要がある。

(濱吉 美穂)